

歴史的転形問題の考察^{*)}, 1)

Some notes on the Historical Transformation Problem

勝田 政 広¹⁾
Masahiro KATSUDA

目 次

- I. 序
- II. 「歴史的転形の内容」
- III. Morishima・Catephores と Meek
- IV. 結

I. 序

転形問題の論争史において、Meek は労働価値論の理解に関しては疑いもなく第一人者であろうし、また Marx 経済学を体系化してみることでできた数少ない転形論者でもあるだろう。そのようなユニークさに加えて、彼は歴史的転形 (historical transformation) という考えを価値から生産価格への転化の中に持ちこんだ。すでに確認したことでもあるが、その「転形」の本来的な問題点は、剰余価値の利潤へのおよび価値の生産価格への転化メカニズムを明らかにすることである。そのメカニズムは純粹に論理的手法でもって明らかにされるわけであり、何ら「歴史」の力を借りずとも説明のつくことがらであるだろう。Meek の転形方法についてはすでに検討をおこなってはいるが²⁾、「歴史的転形論」に関しては、彼の「歴史」理解の不十分さを指摘したにとどまった。したがって本稿では、彼の言う「歴史的転形」を検討するとともに、いわゆる「論理的歴史的方法」についてもふれてみることにする。

「歴史的転形」の検討にさいしては、森嶋通夫氏と George Catephores 氏の共同論文³⁾を議論のたたき台として用いることにした。その論文に対する Meek 本人のコメント⁴⁾とそれに対する両氏の Reply⁵⁾は、より Meek の論旨を明確化しているので、あわせて用いることにした。

さて、我々が一般に「歴史」と言う時は、時代的経過とともに人類史におこった様々の現実的な事象を想起する。と同時に、その諸事象の背後に存在した時代のうねりを考える。しかし Marx は単にそう考えただけではなく、論理的歴史的な視点で経済システムを考察した。しかし彼が経済理論体系の総仕あげの色彩をもつ「資本論」を自らの手で完成できなかったこともあって、彼の方法論としての論理的歴史的方法は様々な解釈がなされているようである。本論へ移るまえに、様々な解釈の概略をたどり、Meek のその中における位置づけを明確化してみよう。おのずから、彼の言う歴史的転形の姿が浮きぼりにされようし、彼の歴史の理解のアウトラインがぼんやりとながらうきでてこよう。

マルクスは、史的唯物論とならんで、上向法を有力な分析手法として用いた。彼の著作において、上向法の解説はいろいろな箇所に見受けられるが、『経済学批判序説』の中の「三. 経済学の方法」における規定が、最もよく彼の意を表わした叙述と思われる。『そこで、もしわたくしが人口からはじめるのであれば、それは全体の混沌とした表象なのであり、いっそうたちいて想定することによって、わたくしは分析的にだんだんとより単純な概念にたつするであろう。つまりわたくしは、表象された具体的

*昭和55年2月18日原稿受理

1) 大阪産業大学短期大学部

なものからますます稀薄な abstracta《一般的なもの》にすすんでいき、ついには、もっとも単純な諸規定に到達してしまうであろう。⁶⁾』すなわち、経済学研究は、可視的な、具体的かつ現実的なものから、より簡単な抽象化したカテゴリーへと近づくという方法をとると言っているのである。これが上向法と呼ばれる方法論である。しかし、マルクスは前出の引用に続き、次の三点の重要性を指摘している。⁷⁾ まず第一に、ヘーゲルが考えたように上向法は、実在的なものの産出過程ではなく、主体および社会がつねに前提として表象に浮かべられねばならないのであるということ。第二に、上向法は、歴史的過程に照応していること。第三に、抽象的なカテゴリーを考える際にも、つねに、近代ブルジョワ社会が主体として思いうかべられねばならないこと。

マルクスの指摘のうち、第二の点が、論理的歴史的方法と呼ばれることについての叙述の1つである。少し長くなるが、解釈の分れるところでもあり、かつ重要な叙述なので、引用してみよう。

『だが、これらの単純な諸カテゴリーはまた、いっそう具体的な諸カテゴリーにさきだって、独立の歴史的または自然的実在をもつのではなからうか？……………貨幣は、資本が実在する以前、銀行が実在する以前、賃労働などが実在する以前に実在しうるし、また歴史的にも実在した。そこでこの方面からはつぎのようにいうことができる。すなわち比較的単純なカテゴリーは、比較的未発展なひとつの全体の支配的諸関係または比較的発展したひとつの全体の従属的諸関係——そうした諸関係は、その全体が、比較的具体なカテゴリーで表現されているような方向へ発展するまえから歴史的にはすでに実在していたのであるが——を表現することができるということ、これである。そのかぎりでは、もっとも単純なものから複雑なものへと上向していく抽象的な思考の歩みは、実際の歴史的過程に照応しているといえるだろう。⁸⁾』

以上のように Marx は上向の過程は、歴史的過程に照応すると述べている。そこですぐさま次の二点が問題となるだろう。すなわち、まず第一に、資本論冒頭の商品は如何なる論理的性格（歴史的性格をおびていると考えるならばそれをも）を持っているのかということ。第二に、価値と生産価格の関連性は、論理的歴史的な視点からみると、どうなるかということ。以上の二点である。後者について換言するならば、論理的序列のうえでは、価値→価値価格→生産価格→市場価格となるが、論理と歴史が、それも、もし現実の歴史が照応するというのであれば、どのような照応関係なのかということである。

もしいわゆる「歴史的転形」が存在すると考えるのであれば、これがその主題である。以上については様々な議論があるが、まず最初に、論理的展開には歴史性を付与すべきではないという考え方をとりあげよう。宇野弘蔵氏は次のように言われた。「ようするに商品形態の発生、発展は、それ自身に歴史的発展を決定するものとはいえないのである。それは社会の歴史的発展の動きをなす生産力自身を通してはじめて歴史的規定性を持ちうるのである。⁹⁾」つまり、宇野氏の場合、生産過程が商品の価値関係をもとにして実現されることのみにより価値法則が明示されているのであり、労働価値論と生産価格論の関連性は、勿論、歴史の介在を許すものではないと考えられるのである。したがって、宇野氏は当然のことながら歴史的転形は存在しないと考えるのである。

次に最も古典的と思われる単純商品生産からの転化について考えてみよう。この議論の典型的な考えは、宮川実氏の資本論研究においてみられる。「論理的発展に照応する歴史的発展は、具体的な歴史的発展ではなく、具体的な歴史的発展から偶然性と攪乱の影響とを捨象した歴史的発展である。しかもそれは、古代社会や封建社会そのものの発展ではなく、古代社会や封建社会のうちに従属的な一の経済制度として存在する単純商品生産の歴史的発展である。……………それゆえ単純商品生産は、具体的な歴史においても、支配的な生産様式と絡みあい、その強力な影響をうけ、それを戦いながらではあるが、それ自身のもつ生産関係との矛盾によって発展したのである。¹⁰⁾」つまり宮川氏は、単純商品は、論理的にも歴史的にも、資本主義の前提であり、その発展の基礎をなすと、考えられたのである。価値と価

格の照応関係については、大島雄一氏の次の指摘がより明解であろう。すなわち、「資本の生成の法的過程は、本来の商品生産の第一段階として単純商品生産段階を設定することによって合理的に説明しうる。¹¹⁾」というように単純商品生産段階をとらえたのち、その段階では、「再生産の法則＝自然価格法則は『価値価格の法則』として現象する。¹²⁾」と言われるのである。さらに、単純商品生産段階＝初期資本主義の歴史像は、価値価格の法則により、生産者の両極分解を経て、資本主義的生産が成立し、そのことにより、「資本一般の完成の過程が、同時に、物質代謝過程での社会的生産力のより高次への移行……を意味すること、その商品生産的表現としての単純商品生産から産業資本主義段階への移行を意味する……。¹³⁾」と言えるとされるのである。すなわち、産業資本主義段階に至れば、価値価格が生産価格に転化すると大島氏が考えられていることから明らかなように、論理と歴史が照応するという立場を代表する論者ととらえてもよいだろう。

価値の生産価格への転化が、単純商品生産から資本主義的生産へという論理的歴史的発展に照応するという立場の、いわば亜種の色彩を持つ考え方に、資本論冒頭の商品は資本主義的商品からの抽象であるという見解がある。向坂逸郎氏¹⁴⁾がそれを代表するであろう。その考え方をさらに進めれば、価値法則は初期資本主義段階に妥当するという考えに至るのである。見田石介氏は「生産価格は、資本とともにあたえられるものでなく、資本主義的生産様式の一定の発展の段階においてはじめて発生する……。¹⁵⁾」と考え、その時期とは、大工業の段階であろうといわれる。

我々がこれから検討しようとしている Meek を、あえて以上の四通りの考え方のうちに分類するならば、見田氏に近いといえるだろう。すなわち彼は、「労働価値論史研究（再版）¹⁶⁾」の第2版への序文において、3段階説¹⁷⁾ともいべきモデルを提示しているのである。（第1段階）単純商品生産段階（第2段階）価値と価格のまだ一致している先資本主義段階＝Meek のいう morning-atter 段階（第3段階）資本主義的商品段階、そのうち第2段階とは、資本主義の初期段階にはかならず、彼は論理的歴史的展開を、価値から生産価格の転形に対して与えているのである。

以上から、Meek の位置づけがはっきりしたであろう。本論においては、彼の「歴史的転形」の内容を詳しく検討することにする。

1) 本稿は、昭和54年度大阪産業大学産業研究所特別研究費をもとにした研究の一部である。

2) 拙稿「転形問題の系譜」大阪産業大学論集（社会科学編）47号 昭和53年1月1日

3) Morishima, M. & Catephores, G.,

“Is there a ‘historical transformation problem?’” *Economic Journal*, Vol. 85, (June, 1975).

この論文は一部を変更し、次の本に所収されている。

Morishima, M. & Catephores, G.,

Value, Exploitation and Growth, Chapt. 7 (McGraw-Hill, 1978).

4) Meek, R.L., “Is there a ‘historical transformation problem?’ A comment,”

Economic Journal, Vol. 86, (June, 1976), 342-347.

5) Morishima, M. & Catephores, G.,

“The ‘historical transformation problem’: A reply,” *Economic Journal*, Vol. 86,

(June, 1976), 348-352.

この論文も一部を変更し、前掲書 Chapt. 7 (202-206) に所収。

6) Marx-Engels Werke, Bd.13, (Dietz, 1975). に所収。（以下 Werke, Bd. 13, と略記）

Einleitung zur Kritik der Politischen Ökonomie, S. 631

訳本としては、「経済学批判」武田隆夫他訳 岩波文庫 昭和31年を用いた。訳 312P 参照

（以下、「経済学批判」からの引用については、“Kritik,”『批判』と略記する。）

7) *ibid.*, SS. 632-639, 訳 PP. 313-324

8) *ibid.*, S. 633, PP. 314-315

- 9) 宇野弘蔵「価値論」青木書店 1965年 P.21
- 10) 宮川 実「資本論研究 第四号」青木書店 1949年 PP.68-69
- 11) 大島雄一「増補版 価格と資本の理論」未来社 1974年 P.281
- 12) 同 前
- 13) 前掲書 P.282
- 14) 向坂逸郎「経済学方法論」河出書房 1950年
- 15) 見田石介「価値および生産価格の研究」新日本出版社 1972年 P.178
- 16) Meek, R. L., *Studies in the Labour Theory of Value 2nd. ed.*, Lawrence & Wishart, 1973.
初版に関しては邦訳がある。
「労働価値論史研究」水田 洋・宮本義男共訳 日本評論新社 昭和32年
- 17) Meek の3段階説のプロトタイプともいうべきものは、彼の著書 *Economics and Ideology and other essays—Studies in the Development of Economic Thought—*, London, 1967. (邦訳「経済学とイデオロギー」時永淑訳 法政大学出版局 1969年) に所収されている論文「カール・マルクスの経済学の方法」において展開されている。その論文は、「労働価値論史研究(再版)」の Appendix にそのまま収録されている。

I. 「歴史的転形」の内容

Schumpeter のいう vision を Marx にあてはめれば、「資本所有者の階級と賃金取得者の階級とのあいだの社会・経済的生産関係¹⁾」であると考えることより、Meek は Marx の方法論に関する議論を始めた。次に Meek は、その vision に密接な関連のある分析方法として3つ列挙する。すなわち、(1)生産関係の把握 (2)「論理的・歴史的方法」(3)抽象的な前資本主義社会の想定、の3点である。つけ加えると、「論理的・歴史的方法」に関して Meek は、エンゲルスの論理的歴史的方法に関する叙述²⁾に全面的にしたがっている。また、(3)に関しては、資本主義が突然に前資本主義に侵入すると単に想定するのではなく、前資本主義社会に支配的な諸法則を研究した後に、そのような想定をすべきであると考えている。ただ、想像上の前資本主義社会は歴史的現実の正確な表現でないことと、理想的な社会形態の描写を意図したものでないことをつけ加え、論理的色彩を歴史に比してより強くうち出している。そして Meek はその他の分析用具および方法は単に上記の3点の従属物にすぎないものとして理解するのである。

さて、以上の方法の適用に進むのであるが、もちろん「価値論」が最も重要な分野であると Meek は考える。そして、「『単純商品』から出発して、次に、その『論理的にも歴史的にも二次的な形態』——『資本主義的に変更された商品³⁾』」の分析へと Marx は議論を進めたと彼は考えるのである。したがって Meek の理解するところでは、Marx の冒頭の価値分析は、Meek のいう前資本主義社会での生産関係分析に該当し、「彼の〔価値〕分析の第二の部分は、資本主義的な生産諸関係が『単純な』商品生産に固有な生産諸関係を侵害するばあい⁴⁾」該当しているということになる。

このあと突然、マルクスの価値論は、前資本主義社会、初期資本主義社会、発展した資本主義の三段階に区分されるという。そして、Meek の叙述から察するにそれらは、抽象上の歴史的区分であり、それぞれの段階に対してカテゴリーや論理段階が照応するということになるのである。当然、そのことは論理と歴史の対応を意味しているのであり、それぞれの段階については価値から出発した3つの価格カテゴリーが照応していることとなる。何故3段階に区分せねばならないかについては、詳しい叙述が見あたらないものの、前資本主義社会を設定する意味については、次のように Meek は言う。「もし、われわれが、一社会——すなわち商品関係が『資本主義的に変更され』るにいたった社会——の本質を見抜くことを望むのであれば、そのばあい、一つの可能な手続き方法は、商品関係が支配的でありながら資本所有者と土地所有者の階級がまだ独立には存在しないところの、抽象的な前資本主義社会

を想定することからはじめるということである。この普遍化された前資本主義社会の状況において商品関係そのものを分析し、その後、資本主義的生産諸関係がそれを侵害するばあい起こることの検討に進みうるのである。⁵⁾」つまり、資本主義的生産様式の本質を把握するには、先資本主義社会における商品生産および交換の分析が必須条件であると Meek は考え、当然、前資本主義段階を想定すると言うのである。しかし何故そうなのかという経緯については不明である。それぞれの段階についての説明が続くから、とりあえずそれらをフォローしてみることにする。

(1) 抽象的な前資本主義社会

Meek は資本論冒頭における商品とは、エンゲルスの言うように⁶⁾「単純商品」であり、したがって資本所有者および土地所有者階級の存在しないような、抽象的な前資本主義社会における商品関係を想定する。この段階では、投下労働量により交換価値の量が規定され、したがって単純商品生産社会＝前資本主義社会では、均衡価格は投下労働量に比例する傾向にあると Meek は考えるのである。

(2) 初期資本主義社会

この段階では、資本・賃労働関係が成立するが、生産様式は(1)の段階と同じであり、かつ均衡価格は投下労働量に比例する傾向にあると想定される。Meek の念頭においていた資本論の論理段階は、第Ⅰ巻第5章第1節労働過程と、第9章剰余価値の率と量である。だが、均衡価格は近似的投下労働量に比例するといっても、現象形態とは明らかに矛盾がみられると Meek は考え、「この『外見上の矛盾』の解決は、その後の論理的・歴史的な分析段階のために留保されている。⁷⁾」と言って、次の段階へつないでいる。

(3) 資本主義社会

この段階に対応する資本論における論理段階とは、第Ⅲ巻である。つまり、『資本主義的に変更され』た商品関係と価値関係の分析が、この段階ではなされると Meek は考えるのである。前段階とは異なり、発展した資本主義社会が歴史として対応し、資本に対して均衡利潤率の成立していることが、論理的に対応することとなる。言い換えれば、Meek は、この段階を生産価格の支配する社会として理解しているようである。以上のように、価値支配の社会——価値および剰余価値支配の社会——価格と利潤の支配する社会⁸⁾というような序列で Meek は分析を進めた。とすると、資本論第Ⅲ巻の出版以来問題とされてきた、Ⅰ巻とⅢ巻の矛盾、すなわち、価値と生産価格の連関性に対する疑問がでてくるが、Meek は深い説明をここではくわえていない。しかし、次のようなコメントをしている。「しかし、第一巻の分析も第三巻の分析も、いずれも、それだけを取り上げたのでは、当然マルクスの価値論を構成するものと言うわけにはいかないということは、強く強調しておかねばならない。マルクスが展開したところの価値論は、第一巻の分析と第三巻の分析との巧みに結合された合成物だった……。⁹⁾」

以上のように3段階論ともいべき、社会形態の変遷をたどったあと、Meek は、次のように言って、「歴史的転形」に関する叙述をしめくくっている。「われわれがすでにみたように、マルクスの価値論は、深遠な方法論上の含蓄に満ちた一個の複合的な分析であり、生産諸関係と相対価格とのあいだの因果関係が『単純』商品生産の資本主義的商品生産への移行につれて漸次に変更される過程を一般的な仕方でも描いたものであった。この理論のために、資本主義内部において、マルクスにとって考慮する必要のあった唯一の変化は、資本家間の競争拡大の結果として、平均的または標準的利潤率が現われるということであった。¹⁰⁾」

以上の叙述からは、彼自身「歴史的転形」という言葉を用いていないが、前資本主義対価値、初期資本主義対価値および剰余価値、資本主義対生産価格というように、論理的序列に対して歴史的序列を対応させていることからわかるように、価値から生産価格への転形に照応する形で、前資本主義から資本主義への歴史的転形を想定していることが、はっきりしたことと思う。ただし再度、Meek の意を受けた形ではっきりさせておかねばならぬことは、Meek の言う歴史とは、「必ずしも、歴史的に同一で

ありうる現実の諸形態を表わしてはいない。¹¹⁾」ということであろう。しかし、それ以上の記述は見あたらずにことからしても、Meek の各段階とは歴史より抽象した想像上の各経済社会のことであると理解するのが妥当であるように思われる。

- 1) Meek, R. L., 「カール・マルクスの経済学の方法」時永訳「経済学とイデオロギー」所収 以下「方法論文」と略記。
ミーク「方法論文」 P. 96 訳 P. 142
- 2) Engels, Friedlich, *„Karl Marx, Zur Kritik der Politischen Ökonomie“*
Kritik, 所収 Werke, Bd. 13, SS. 474-475 【批判】 PP. 264-265
- 3) 前掲論文 P. 99 訳 P. 147-148
- 4) 同 前
「このばあい」とは、我々の言う価値価格 (Wertpreis) 段階に該当すると、Meek は言っていないが、明らかにそう考えてもよさそうに思われる。
- 5) 前掲論文 P. 100 訳 P. 149
- 6) Engels, F., 前掲書 S. 475 訳 P. 265
「われわれは、歴史上、事実上われわれのまえにある最初のしかももっとも単純な関係から出発する。」
- 7) 前掲論文 P. 102 訳 P. 152
- 8) ミークは前掲論文においては、このような言い方をしていないが、*Studies in the Labour Theory of Value 2nd. ed.*, の再版への序文 PP. 24-25 において、このような用法をしている。ただし、内容的には、我々のフォローしてきた論文と同じである。
- 9) 前掲論文 P. 104 訳 P. 155
- 10) 前掲論文 P. 106 訳 P. 158
- 11) 前掲論文 P. 99 訳 P. 148

Ⅲ. Morishima・Catephores と Meek

森嶋氏と Catephores 氏は (以下、両氏と略記)、Meek の「歴史的転形論」に対して批判を加えた。Meek がそれに対してコメントをし、またさらに両氏がそれに答えるという形で議論がなされた。¹⁾ しかし私の知るかぎりでは、それ以後この点に関しての議論が三氏によりなされていないようである。²⁾ とりあえず論点をピックアップしてみると次のようになる。

1. エンゲルスと Marx の理解に差があるのかないのか。特に論理的歴史的方法の理解に関して。
2. Marx の価値論は歴史よりの抽象なのか、論理よりの抽象なのか。
3. 資本主義的生産様式の分析という Marx の主要課題にとり単純商品生産分析のもつ意味は何なのか。
4. 転形問題は論理分析の問題であり歴史分析の問題ではないのかどうか。

以上の4点は互いにクロスオーバーして議論されねばならないであろうから、1つ1つ、つきあわせて議論する性質の問題ではない。したがって複雑化は避けられないであろうが、各論文を1つずつ検討してみることにする。

「森嶋・Catephores 論文」の主題は、「歴史的転形」は存在せず、転形問題は論理分析の問題であるということである。したがって、Marx の転形に関する理解はどのようなのかということに分析の主眼がおかれた。

「歴史的転形」とは両氏の理解するところでは、単純商品生産下の価値どおりの交換から資本主義下での価格に支配される状態への移行のことである。ミークは「歴史が実際に、1つの型の供給価格の別の型のそれへの転形を、もたらしたことをしめせば、まったく十分。³⁾」と言っているが、両氏は彼

が現実の歴史的推移を示す供給価格をフォローアップしていないとする。たしかに資本論第Ⅲ巻の補遺や『要綱』において現実の歴史からくみあげた進化シエーマについての叙述はみられるが、それらは歴史の抽象化の方法が異なるとされる。したがって「転形を歴史過程として労働価値論を正当化するには、単純商品生産からの移転は、歴史的現実からの抽象化として示さねばならない。⁴⁾」と両氏は考えるのである。

次に両氏は先資本主義下における価値法則に関するエンゲルスと Marx の理解の差についてふれている。すなわち、エンゲルスは先資本主義下でも価値法則が妥当するといひ、マルクスは、必ずしもそうではないことの例証として物々交換や不等価交換の例をあげているというのである。ただし、単純商品生産のもとでは、価値法則に基づいた交換がなされるとエンゲルスもマルクスも考えていることから、両氏は「単純商品生産」を問題にする。両氏の理解する単純商品生産とは、自家消費だけでなく独立した生産者の分配へと発展した市場向けの生産でもあるということである。そして、資本論第Ⅰ巻25章と第Ⅲ巻47章の引用⁵⁾をふまえて、マルクスは、単純商品生産を、封建制や資本主義と同じ別個の社会経済システムと考え、そしてまた、マルクスは、単純商品生産システムの歴史的軌跡の表現として、古代、後期封建制、初期の現代植民地の正確に3つの時代に区別したと考える⁶⁾のである。そして資本論第Ⅰ巻と他の関連性のある他の部分とのコントラストから、マルクスは単純商品生産から資本主義的生産への移転シエーマはただ歴史的進化としての側面について適用できると考えていたようだ⁷⁾と推論し、したがって「単純商品生産は、歴史上純粋の型でも近似的な型でも現実のものではなかった……。7)」と結論づけるのである。さらに、先資本主義経済では、商品生産が未発達であり、商業資本主導型経済であることから、生産は交換価値に従属すると Marx は考えている⁸⁾と両氏は理解する。したがって、Marx の理解するところでは、未発展な経済においては効用が支配的ということになろうと両氏は考えるのである。したがって価値支配の社会は先資本主義社会でなく商品生産の発達する資本主義社会のように理解するのである。ゆえに両氏は、歴史の側面から先資本主義的価値を想定しようと試みるならば論理矛盾をもたらすと考え、さらに、マルクスは先資本主義経済を価値概念の軌跡とみなしていたのではなく論理的シュミレーションをつくるために考えた⁹⁾と理解するのである。したがって単純商品生産社会に関しては、その目的のためにつくられたモデルであって、モデル間の差異はただ生産手段の所有形態だけということになる。以上のように両氏は、単純商品生産の先資本主義価値時代は、マルクスの価値理論と両立できないと試論したのである。もしその試論を否定しようとするならば、現実の史実をもとに、先資本主義における交換比率が財の労働決定による価値に近似的であるということを示さねばならないと両氏は考えるのである。

それゆえ、Meek の試みはどうかということに議論は進むことになる。Meek の議論をフォローしたあとで、先資本主義的価値時代を想定することなく資本主義価値時代から資本主義的生産価格時代への推移を説明する必要があると両氏は言う。そのような考えからすると、当然のことながら両氏にとり Meek の3段階論はみとめがたいということになる。それで、Marx とエンゲルスを比較するという作業へと移るのである。両氏の理解では次のようになる。エンゲルスは、初期資本主義では価値で売買されず先資本主義時代の商業資本により創出された条件に適合させることにより生産価格支配へと移行する⁹⁾と考えたと理解したのである。それに対し、マルクスは資本主義では当初から生産価格で取引されると考えていたと理解するのである¹⁰⁾。

したがってマルクスにしたがうかぎりでは、価値と生産価格の間には歴史的な不連続があると両氏は考えるのである。

両氏はさらに、マルクスにとり価値と抽象的労働は論理的抽象だと考え、さらに次のようにいわれる。「これらの引用¹¹⁾から明らかなように、マルクスは価値は（また抽象的労働も同じく）ただ資本主義に適用する時にだけ完全に有効であると考えていた。¹²⁾」さらに続けて、マルクスの単純商品生

産モデルは、資本主義経済における搾取を説明するための仮説的モデルであると述べ結論とするのである。

森嶋・Catephores 両氏によると、Meek の歴史的転形という考え方は、先資本主義的価値支配体制から資本主義生産価格体制への移行を歴史的現実からの抽象として示していないから認めがたいということになる。さらに、エンゲルスは先資本主義の単純商品生産の価値時代と資本主義の生産価格時代という2段階論を支持したであろうから、Meek の言うような3段階論に賛成しなかったろう¹³⁾と両氏は考えるのである。

Meek は、論理的歴史的方法に関する考えをのべたあと、転形問題にとり論理的歴史的方法のもつ意味は何かと問いかけることから反論をはじめめる。Meek は両氏の仮定、すなわち、独立した先資本主義の価値時代 (independent value epoch) に近似した現実の歴史を示すことが必要であるという仮定、が与えられると両氏の言い分は正しいと考える。また、マルクスはそうっていないのだから、両氏が independent value epoch は存在しなかったというのも正しいと言う。もしマルクスがそう言っているのであれば、資本主義下でのみ商品生産が全面的に発展すると言っている事実と矛盾すると Meek は考えるが、大事な問題は、歴史次元をマルクスの転形分析に帰することにより正当化する論理と歴史の一致であると考えるのである。マルクスは歴史的転形問題をかなり正確に提示しているとして引用¹⁴⁾したのち、Meek は次のようにいう。「(マルクスが)ここで、商品価値は論理的にだけでなく歴史的にも生産価格に先行すると言った時、単純商品生産に支配される independent な先資本主義価値時代の存在と価値どおりの商品の売買を暗に示すためではない。¹⁵⁾」そして、マルクスがそのように言う時には、別個の歴史時代 (historical period) よりむしろ、長い複雑な歴史過程、すなわち、連続的な先資本制社会の形態において生ずる商品生産、交換、貨幣に関して、商品価値が抽象的労働により体化されるようにと成長する過程について言及しているのだと Meek は主張するのである。そしてまた、森嶋・Catephores 氏の疑問に答えるように、単純商品が資本主義的に修正されるのは、現実の歴史では、直接生産者が生産手段から切り離され労働力が商品に転化する原始的蓄積の中期のことであろうと述べているのである。したがって Meek は論理的転形と歴史的転形の関連性について次のようにまとめている。「マルクスの価値から生産価格への論理的転形は、“corrected reflection” (修正された反映) としてみなされるべきであるということは、確実に、この単純商品生産から資本主義的商品生産への歴史的転形によりもたらされた価格決定様式の変化なのである。¹⁶⁾」

続いて Meek は、森嶋・Catephores 両氏が価値時代と生産価格段階の間の中間段階の妥当性に疑問をなげかけたことに対して、答を出す。彼はその中間段階のことを“Morning after 段階”と呼んでいるが、その段階では資本家による生産管理と搾取が始まるが、ただし産業間の資本移動はまだおこらないと考える。そのことは Marx の仮説では、価値どおりの交換と利潤率の不等を意味するだろうと Meek は理解するのである。したがって、マルクスは論理的歴史的方法を価値と価格に適用していると Meek は信ずるのである。ただし、マルクスがその仕事を十分に果たしたかどうかということ、その仕事をする価値のあることかどうかということは別問題であるとして、マルクスの転形方法に対する批判をかわしてこの論文をしめくくっている。

以上のようなコメントに対して森嶋・Catephores 両氏は、Meek の賛同するエンゲルス解釈とマルクスの方法の差違を強調する。エンゲルスの見解では、マルクスの単純で抽象的な概念からより具体的で複雑な概念へと止揚する方法は、論理的に抽象的な妥当性のある歴史過程の反映にすぎぬということになると両氏は理解する。したがって、概念上の構成するものが歴史的進歩であるとするならば、マルクスのやらなかった進歩を明らかにすべきであるが、エンゲルスはそれをしていないと考えるのである。ただし、Meek の場合、中間段階を設定していることから、そのことに関しては評価を下しているように私には思われる。一方、両氏の理解するところでは、マルクスは抽象的概念と現実の歴史に

については慎重であると考え、『批判序説』からの引用¹⁷⁾をもとに次のように言うのである。「彼は演繹的な理由づけのプロセスを現実の反映というよりむしろ知的な産物………としてみている。¹⁸⁾」さらに両氏は、複雑な事実を単純な成分に分解することは、単純な反映または現実の修正された反映とは異なるプロセスであると考えているのである。すなわち、反映は受動的であるのに対し具体的な理論対象の構造は能動的であるから、現実に対してはある程度の自由があると考えているのである。それでマルクスは歴史上の特定の現象に関する連関順序を決定せずにおいていた、と両氏は理解している。したがってマルクスは価値を歴史的転形を説明するためにではなく資本主義経済のメカニズムをあきらかにするために用いているということになる。すなわち、両氏のいうところでは、「歴史的転形に関してはマルクスは、明確な理論を構築することをさしひかえている。¹⁹⁾」ということになるだろう。

1) • Morishima, M. & Catephores, G.,

“Is there a ‘historical transformation problem?’” *Economic Journal*, Vol. 85, (June, 1975), PP. 309-328.

以下、「森嶋・Catephores 論文」と略記

• Morishima, M. & Catephores, G.,

“The ‘Historical Transformation Problem’: A Reply,” *Economic Journal*, vol. 86, (June, 1976), PP. 348-352.

以下、「Reply 論文」と略記

以上は、一部を変更し、前出の本に所収されている。引用は、大部分本から引用した。

• Meek, R. L., “Is there a ‘historical transformation problem’? : A comment,” *Economic Journal*, Vol. 86, (June, 1976), PP. 342-347.

以下、「Comment 論文」と略記

2) 特に R. L. Meek 氏が1978年8月に死去されたこともあり、この点に関する議論は平行線をたどったままとなってしまうている。

3) Meek, R. L., “Some notes on the ‘Transformation Problem’,” *Economic Journal*, (March, 1956) P. 107

「価値の価格への『転形の問題』についての若干の覚え書き」 P. 167

「マルクス経済学の展開」山田・水田訳 紀伊国屋書店 1958年 所収

4) 「森嶋・Catephores 論文」 P. 182

5) Marx, K., *Das Kapital*, Bd. I, Kap. 25, S. 792, Dietz, 1971

「資本論」第1巻 第25章 P. 954 向坂訳 岩波書店

(以下、訳としては向坂訳を用いる。)

Das Kapital, Bd. III, Kap. 47, SS. 814-815 訳 P. 1007

6) 「森嶋・Catephores 論文」 P. 184

7) 前掲論文 P. 185

8) *Das Kapital*, Bd. III, SS. 342-343, 訳 P. 409

9) 「森嶋・Catephores 論文」 PP. 194-195

エンゲルスをこのように理解した論拠は、資本論第III巻所収の補遺である。

10) そのように考える論拠は、*Kapital*, Bd. III, SS. 880 (P. 1090) である。

11) „Einleitung zur Kritik der Politischen Ökonomie,” *Werke*, Bd. 13, S. 636, 訳 P. 319

以下 „Einleitung,” と略記

12) 「森嶋・Catephores 論文」 P. 197

13) 前掲論文 P. 196

14) *Das Kapital*, Bd. III, SS. 183-208, 訳 PP. 215-245

15) 「コメント論文」 PP. 344-345

- 16) 前掲論文 P. 346
- 17) „Einleitung,” *Werke*, Bd. 13, S. 632, 訳 P. 313
- 18) 「Reply 論文」 P. 349
- 19) 「前掲論文」 P.P. 252

IV. 結

前章であきらかになったことは、Meek は論理的転形は歴史的転形の *corrected reflection* であるというように考え、さらにマルクスは *morning after* という中間段階を意識して設定しなかったものの、それに類することを考えていたであろうと推定していることである。一方、森嶋・Catephores 両氏は、マルクスは価値を先資本主義的単純商品から抽象したのではなく、かつ歴史的転形をマルクスは考えていなかったろうと類推しているのである。

したがって、Meek と両氏の見解は正反対であるが、エンゲルスとマルクスの理解に差があるかないかということも含めて、マルクスの論理的歴史的方法をいかに解釈すべきか、いかに読みとるべきかということに集約されるであろう。その際、我々は、エンゲルスと同じ理解をしようとする、違った考え方をしようとするそれは問題でないということに留意すべきであろう。大事なことは、Marx が彼の方法論についてどのように説明し、経済理論をその上にいかに構築し、何をのべたのかということである。エンゲルスがどのように注釈をくわえたかというのは副次的な問題であり、Marx の仕事とエンゲルスの仕事は峻別すべきであろう。

上向法と論理的歴史的方法という Marx の二大方法論に関する叙述は、彼の作品のあちらこちらに見うけられるが、最も適確に表現しているのは『経済学批判序説』の「三、経済学の方法」であろう。抽象的なものと具体的なものについての叙述から Marx ははじめている。現実的で具体的なものは可視的であるから、それを前提にして始めることは一見正しいようにみえるが、それではただ単に、分業とか貨幣とか価値といった実在的なカテゴリーを見出し、それらを並べて説明するだけに終始してしまう。その方法は、「経済学がその成立の過程で歴史的にとった道である。¹⁾」と Marx は言うのである。方法論としては、今のべたような、具体的なものから抽象的なものへと導く下向法のほかに、その反対をたどる上向法があるが、一度下向の道をたどって抽象的概念を把握し、その上で上向の道を歩むのが科学としては正しい方法であるといえよう。したがって Marx は抽象的なもの＝商品の分析から資本論体系の叙述をはじめるのである。「具体的なものが具体的であるのは、それが多くの規定の総括だからであり、したがって多様なものの統一だからである。だから思考においては、具体的なものは、総括の過程として、結果としてあらわれ、出発点としてはあらわれない。たとえそれが、実際の出発点であり、したがってまた直観と表象の出発点であるにしても。²⁾」

何故、商品の分析から始めるかということは、これで理解できるが、次に上向法と歴史的発展過程とどのような関係にあるのかということが問題となるだろう。Marx は次のような言い方から、それに関する説明を始める。「抽象的なものから具体的なものへ上向する方法は、ただ具体的なものを自分のものにするための、それを精神のうえで具体的なものとして再生産するための、思考にとっての仕方にすぎない。だがそれは、けっして、具体的なもの自身の成立過程ではない。³⁾」たとえば、マルクスの例にしたがうならば、交換価値は古代から存在しているのであり、交換価値はただ「すでにあたえられている具体的な生きた全体の抽象的で一面的な関連としてのほかに、どうしても実在のしようがない。⁴⁾」のであって、交換価値という抽象へ導びいた諸具体物の発展過程によって実在するものではないのである。この叙述で「具体的なもの自身の成立過程ではない」という箇所だけを取り出して論理的歴史的方法の Marx の叙述上の矛盾をひきだそうとする人もいるが、大事な叙述はすぐそのあとに続いた表現であることに留意すべきであろう。ただし、我々が、導出された抽象概念を思い浮かべるとき

には常に具体的なものを思いうかべねばならないことは言うまでもなからう。そうすることにより、下向法で獲得した抽象概念の誤ちを見出したり正しさを確認できたりするわけであるから。

次に単純なカテゴリーと具体的なカテゴリーについて考えてみよう。ちなみに前者を交換価値、後者を貨幣というように読みなおしてみると、以下の Marx の叙述はより鮮明となるだろう。「比較的単純なカテゴリーは、単純な家族共同体または種属共同体の財産に対応する関係としてあらわれる。それは、もっと高度な社会では、いっそう発展した有機体の比較的単純な関係としてあらわれる。⁵⁾」「単純な諸カテゴリーは、未発展な具体物が、まだいっそう多面的な関連または《いっそう多面的な》関係……をうみだしていないときに、自分を実現したかもしれないその諸関係の表現であるということ、他方また、より発展した具体物は、そうした単純な諸カテゴリーを、ひとつの従属的な関係としてもちつづけている……。⁶⁾」したがって、交換価値のように、比較的単純なカテゴリーは、未発展の社会経済関係を表現しうると同時に、具体的なカテゴリーで示される発展した社会経済の従属的な関係を表現しうることになる。それゆえ、そのような理解に限れば、「もっとも単純なものから複雑なものへと上向していく抽象的な思考の歩みは、実際の歴史的過程に照応しているといえるだろう。⁷⁾」このマルクスの叙述に、交換価値と貨幣をあてはめると、つぎようになる。交換価値→貨幣という上向過程は、物々交換→貨幣を介在させた交換、という現実の具体的な歴史過程に照応するが、ただし、貨幣を介在とする交換の背後には交換価値という単純なカテゴリーが従属した形態でひそんでいることを銘記せねばならない。ただし、貨幣が存在しなかったにもかかわらず、マンユファクチュア段階まで発展したインカ帝国の例が如実に示すような反例も存在することから、また貨幣経済が全面的に開花するのは商品生産が発展した段階＝資本主義経済、になってからであるということが示すように、「比較的単純なカテゴリーが比較的具体的なカテゴリーにさきだって歴史上実在していたとしても、それは、内包的にも外延的にも完全に発展した形では、なんといってもただ複雑な社会形態にしか属しえない……。⁸⁾」ということに注意すべきであろう。すなわち、交換価値は、下向の道をたどって抽出した抽象概念であり、それは資本主義に最もよくあてはまる。極論すれば、交換価値という抽象概念が完全にあてはまるのは資本主義においてのみということになる。したがって、次のようなマルクスの叙述が続くのである。「もっとも一般的な抽象がすべてのものに共通に成立するのは、がいしてただ、ひとつのものが多くのものに共通にあらわれるもっとも豊富な具体的発展においてだけである。⁹⁾」「もっとも抽象的な諸カテゴリーでさえ——まさにその抽象性のために——すべての時代にたいしてあてはまるにもかかわらず、なおこういう抽象という規定性の点で、それ自身やはり歴史的な諸関係の産物であるということ、そしてそれが完全にあてはまるのは、ただ歴史的な諸関係にたいしてだけであり、かつその内部においてだけだということである。¹⁰⁾」

したがって、社会経済組織を解剖するのに、ブルジョワ社会が発展した多様な生産の歴史的組織であることから、ブルジョワ経済を理解すればよいのであって、先資本主義社会を理解する鍵もその中にあるということになる。だから、資本主義的生産様式とそれに相応する生産諸関係および交易諸関係を探究するのに、Marx は、ブルジョワ社会にとっての『経済の細胞形態』である『労働生産物の商品形態または商品の価値形態』から始めるのである。

以上より明らかになったことは、次の2点であろう。すなわちまず第1に、資本論冒頭の商品とは、発展した資本主義経済から抽出した商品であるということ。第2に、論理と歴史は照応しているということ。ただし、第2の点については次のことが確認されねばならない。1つのカテゴリーを抽出するには当然、具体的な事象を表象にうかべたうえでそうするのであるから、歴史という時には、年代順に、事柄のおこった、文字どおりの歴史を想起すればよい。ただし、いったんそれが抽象のカテゴリーへと止揚してしまえば、カテゴリーの歴史¹¹⁾ということになる。そのカテゴリーの歴史とは、たとえば、商品→貨幣→資本という歴史であり、換言すれば、商品の歴史、資本の歴史ということになる。マ

ルクスが、『序説』において分析を加えたのは、抽象的カテゴリーであることからわかるように、以上の点を銘記すべきであろう。したがって、現実の歴史とカテゴリーの歴史は峻別すべきであり、混同すれば、文字どおりの歴史的序列が、論理の上向過程に対応するという誤った考えに陥ってしまうであろう。Meek はそういう意味で、冒頭商品を単純商品と考えたこととならんで、歴史を文字どおりの歴史、と理解するという、二重の誤りを犯していることになる。森嶋・Catephores 両氏は、最初の誤りをまぬがれているものの二番目の誤ちはまぬがれえなかったように思う。だから、マルクスもその点に関して次のような注意をしているのである。「だから経済学的諸カテゴリーを、歴史上それらが規定的なものであった順序にならばせることは、実行もできないしまたまちがいであろう。¹²⁾」(傍点筆者)

では、はたして Meek の言う「歴史的転形」は考えることなのであろうか？ 答えはおのずから明らかであろう。「Meek の歴史的」転形は当然ありえない。ただし、資本の歴史を歴史と考えるのであれば、その限りにおいて、価値→生産価格は、資本の生成史としての歴史に照応すると言えないこともないだろう。宮本教授は、資本の歴史を、資本前史、資本確立史、資本後史に区分されている。¹³⁾ その際、「資本に先行する現実の歴史は、すべて資本前史に圧縮して考えることができる。¹⁴⁾」ということになるから、Meek の言う「歴史的転形」は、価値：資本前史→生産価格：資本確立史ということになり、その意味においての歴史的転形は存在することになる。ただし、価値から生産価格への転形は、論理過程であって、今言った意味での歴史的転形ですら、ただ単に刻みこまれた歴史的痕跡以上の役割をはたすものではないということを銘記すべきであろう。

1) „Einleitung,” SS. 631-632, P. 312

2) *Ibid.*, S. 632, PP. 312-313

3) *Ibid.*,

4) *Ibid.*,

5) *Ibid.*, S. 633, P. 314

6) *Ibid.*,

7) *Ibid.*, P. 315

8) *Ibid.*, S. 634, P. 316

9) *Ibid.*, S. 635, P. 318

10) *Ibid.*, S. 636, P. 319

11) 宮本義男「資本論の論理体系」第5章参照 日本評論社 昭和46年

宮本教授は私の大学、大学院修士課程の時の指導教官であり、教授の教えにおうところが多い。ただし、本稿の一切の責任はもちろん筆者にある。

12) „Einleitung,” S. 638, P. 323

13) 宮本「前掲書」 PP. 112-122

14) 前掲書 P. 122